

まとめ - 二つの世界 -

わが班では雑誌目録における二つの大きな課題を扱った。雑誌目録の品質管理と電子ジャーナルを中心とした更新資料の目録についてだ。

まず雑誌目録の品質管理の問題であるが、目録の現場に人員が減っている問題が背景にある。そんな状況でも気軽に書誌を作れるように、一人で悩み続けないように、解決するためのマニュアルを作った。雑誌の実務に携わる者で作ったので、すぐに実践に移れる内容を心がけた。

図書に比べて雑誌の書誌は作るの難しい、作業が複雑なので戸惑ってしまうなど、目録作業にしり込みしてしまう声をよく耳にする。職場に目録に習熟した人が多数いて分からないときは聞けばよかったのも遠い昔のことで、人員の削減などで聞ける人のいない職場が増えた。

だが雑誌の書誌を作りたい気持ちは萎えていない。要望は高く NII の目録システム講習会でも雑誌コースの人気の高まっているのもその表れだろう。マニュアル作成が課題となっている品質向上にもつながるのでは、と成果に胸をなでおろしている。なお、目録規則の変化による「軽微な変化」の拡大により変遷基準が変更になるが、解釈が難しく NII の細則が待ち遠しい。

もうひとつの電子ジャーナル書誌については、図書館員の現場からの提案のひとつだ。

よく、環境の変化が早すぎると言われる。

毎年のように変わる契約タイトルと閲覧期間、知らない間に変わる URL、パッケージ購入をすると膨大なタイトルが一夜にして増える構造。

こうした出版社主導の環境整備に、図書館の自前主義(電子ジャーナルリストの作成・管理や電子ジャーナル書誌を OPAC に表示させるなど)では対応できなくなった。増えた図書館の悩みに、業者はビジネスチャンスを見出し、電子ジャーナルの管理ツールを廉価で売り出し、またたくまに各大学に広がっている。

今、何が求められるか？

わが班の雑誌契約、目録作成、システム経験者の知恵を集めて、雑誌目録規則の観点を外し、実務的な提案をした。それに講義で茂出木課長補佐が言われた「全国の学術資源を集約したい」という大きな視野にも対応できるようにつとめた。

今回の発表は二部構成となった。私たちは「二つの世界」が生まれる予感を覚えている。

雑誌の世界では英米目録規則(AACR)や日本目録規則(NCR)の改訂に伴い、従来の逐次刊行物を軸とした概念から逐次刊行物と更新資料という二つの資料概念が広がっている。結果的にわが班の発表も議論を深めるなかで、一部の逐次刊行物の目録の取り方については細かい点までおさらいする内容となり、二部の電子ジャーナルに関しては、従来の雑誌目録の考え方を離れた提案を行ったという点で、雑誌世界の動向に沿ったものに落ち着いたのは驚きだった。目録規則を離れて実務者の視点から討議した提案が二本立てになったことは、今後、雑誌目録にこの「二

つの世界」が広がっていく予兆ともいえないか。

今回の発表に関して、以下のような意見が出た。

- ・ 管理 DB という側面が強いが、アクセス権保有校の閲覧期間が表示されない総合目録を作って利用があるのか？
- ・ 何故、パッケージタイトルを優先するのか？
- ・ 今の CAT - DB において図書もしくは雑誌、どちらの構造を使っても電子ジャーナルの世界を表現するには難しいのが分かった。
- ・ 極端な DB モデル案だったが、実証するにはこうしたモデルは必要だ。
- ・ 今回の案にサービス部門や他部門の意見をいれるとまとまらないのでは？ 根深い問題がある。
- ・ 電子ジャーナル書誌は結論の出ない問題である。

これに関しての次のような応答があった。

- ・ アクセス権保有校の閲覧期間を表示するのは ILL のためというが、この ILL の視点を外して電子ジャーナルの総合目録を考えないと総合目録の存在が不要という極端な結論が出てしまうのではないか？
- ・ 電子ジャーナルは最新データが主になるため、初号主義をとる雑誌の DB 構造では表現は難しい。
- ・ 全国の学術資源を集約するという視点、総合目録の意義から電子ジャーナル書誌を検討することをやめてはいけないと思う。

現段階のそれぞれの立場の意見が集約できた感じのする質疑応答だった。電子ジャーナルの世界は流れが速いというが、来年、今後の情勢はまだ分からない。ある程度契約状態が安定してからでないと、目録という観点から話をまとめるのは難しいようにも感じる。「全国の学術資源を集約」する総合目録という視点を外さずにつきつめないと論議が崩れていく危惧もある。

さてもうひとつの世界の話に戻ろう。

NII の目録システム講習会でも雑誌コースを増設する意向と聞いた。講習会の補助テキストとしてこのマニュアルが利用されれば幸いであるし、わたしたちが講師を務めるに当たって「虎の巻」にするつもりである。

以下は全国の目録担当者へのメッセージとしたい。

図書館で雑誌の目録をとる皆さん、自信をもって目録作業にあってください。
だれも最初は迷います。しかし場数を踏めば度胸がついてきます。この発表が皆様の背を押すことになればうれしく思います。

(付記)

・全国の大学のアクセス権情報を集める意味について

所在目録は ILL の促進を図るものであったが、その観点から電子ジャーナルは ILL に向かない性格をもっている。権利の概念が違う。冊子体は所有できるものであるが、電子ジャーナルはアクセス権をある期間得るという点だ。アクセス権は、電車の定期券のようなもので、利用者は決められた区間(期間)の電車(電子ジャーナル)の利用が保証されているが、駅や電車は所有できない。電子ジャーナルも同じような考え方が当てはめられるだろうか。また、定期券は他人に譲渡できないものだ。このイメージでいけば ILL も成立しにくいものと考えられるのではないか？

では何のために全国の大学のアクセス権を集めるのか？ 雑誌契約の立場からの意見で言うなら、購入や選定の参考データになるのではないかと。という点だ。

どの図書館も予算が減少し、購入方針を網羅的収集から選択と集中化に転換しないといけない時期にきている。アクセス権情報が、大学で電子ジャーナルパッケージ購入の際、全国のどこの大学がどの程度購入しているかを知るための参考データとして活用できるのではないかと、という期待がある。今、購入データは出版社の企業秘密に属するか、各大学図書館協会で把握している程度でオープンにはなっていない。DB 上の公開は、大学にとって出版社とコンソーシアム契約交渉や価格交渉の一助になるのではないかと。また出版社も他社の状況を把握できて、販売戦略に利用できる。両者にメリットのなる DB になると思われる。さらに日本の学術レベルを WEB 上で公開することによって世界への発信にもなるのではないかと。

以上のように従来の ILL とは違う意味を総合目録には付与できる状況を考察した。

(平成17年度総合目録データベース実務研修 雑誌班 中村記)